

2.5. アフリカの屋根 Kilimanjaro 5896m (2002.1.4)

「吾が人生の最高点（物理的最高点と心理的最高点）」

—— *Kilimanjaro* とウィーン生活 ——

—— アフリカの屋根 Kilimanjaro 5896m（2002年1月4日午前七時）

正直なところこの山は私の「挑戦リスト」にはなかった。が、行くことになった。先ず「最高峰」が魅きつけた。「アフリカの」である。5896mの高さも気になった。もちろん今まで登ったことはないし、今後も登りそうにない高さである。が、この山は赤道直下に近く雪は無いと言う。日本人職員の先輩で登った人が居ることを知っていた。その人に登れて私に登れない筈はない、とかねがね考えていた。

—— ウィーン生活（1995年8月～）

一方、ウィーンに来てからの六年、公私に充実感を覚えていた。仕事に「張り合い」を感じ、余暇を楽しみ、故国の良さ、旧知の友との交流と心理的にも今までの人生で最も「幸せ」を感じていた。そして日本での定年を前年春に迎えていた。そんな時に Kilimanjaro で物理的最高点にも立つことになった。こんな背景が登頂時の感動の伏線だった。「物理的、心理的最高点」と本稿を題する理由である。



- 物理的最高点 (Kilimanjaro 登頂)



Kili はアフリカの屋根 (最高峰)。赤道のやや南、タンザニアの東北部、ケニヤとの国境にある。富士山と似たコニーデ式の独立火山である。すそ野が広く見る角度では富士山とそっくりである。すそ野の広がり、その下に点在する湖も富士に似ている。頭の部分の形が多少異なる。

2001 年 5 月、オーストリア山岳会の下打合わせに顔を出した。計画は年末年始の二週間。技術的な難度はさほどではないようだ。が、ためらう要因が一つあった。「数日間はテント泊り、シャワーなし」である。耐えられるか、と思った。でも結局山行の魅力に負けた。全体の行程は三つから成る。高地順応のための訓練登山(12/27-30)、本番の Kili 登山(12/31-1/5)、下山後のサファリ公園他(1/6-8)¹である。

- 高地順応のための Meru 登山(12/27-30)

出発前日までに荷造りは済んでいた。ポーターに預ける袋鞆に 12~13kg 入れるとリュックは殆ど空荷。「これで良いのか」と不安な位である。ガイド指定品に加えて、即席味噌汁、梅干し、乾し納豆、カイロを荷に入れた。体力作りに少々の不安はあったが、多分大丈夫だろう。四時、ガイドのヴェルナーが車で拾ってくれて空港へ。初めて参加者全員と会う。総勢十四名、うち女性四名の全員がオーストリア人。私だけが例外。独りだけの顔見知り親切そうな老人。アムステルダム経由キリマンジャロ空港へ夜九時過ぎ到着までは特別のことはない。空港は二十度を越えている。寒かったウィーンとは様変わりである。ジーパンが鬱陶しい。ホテルへ車で一時間。水シャワーのあと就寝。部屋には蚊帳がある。

翌 12/27 (木) 朝、テラスに出ると Kili が見える。雪が見える付近が頂上か。標高差 5000m もあるようには見えない。あの頂上で何をしようかと考える。「人生最高点」に立つのだからケルンを建てて、日の丸と写真を撮って…。十時、車に荷を乗せて出発。現地ガイド、ポーター、料理人 26 人が同乗する²。出発点の国立公園ゲートに昼過ぎに着いて「いよいよ出発」と思ったら、昼食の準備が始まった。同行のコックが紅茶を入れ、パンを配り、野菜を切ってサラダにし³、チキンの空焼きを配って…。これから登る Meru の山容を前に、傍らで荷の重量を測っている。私は全部の荷をリュックに入れていたため、丸ごとポーターに預けることにする。13 kg 位である。各ポーターは 30 kg 位の荷を持って三々五々と出て行く。昼食後、私は水筒と軽食だけを持って歩き出す。隊の先頭はレンジャー。銃を手にはしている。野生動物への防備と聞く。途中で雨に遭うが雨具はリュックと一緒にポーターの背にある。ガイドの予備雨具に助けられて五時過ぎ Miriakamba 小屋 (標高 2750m) に到着。夕食も美味しい⁴。東の空に夕陽に映える Kili が

¹ 思わぬ自動車事故で中止になった。私は免れたが、仲間五人が重軽傷。完全な回復を祈りたい。

² 彼らのありがたさに感謝することになる。重い荷を運ぶだけでなく行き先ざきで食事を準備し、テントを設営してくれる。「先憂後楽」の言葉を思い出した。

³ 最初は手を出すのを躊躇した。先が長いからとあきらめて生野菜も口にした。結果的には無害だった。

⁴ 全行程を通して予想より美味しかった。嬉しい誤算だった。正直言ってウィーン料理より口に合った。

聳える。中天に満月が輝く。九時過ぎ就寝。

12/28(金)は五時過ぎ起き出す。晴天。山はこうでなくっちゃ、と。七時過ぎ出発。前日は空身で失敗したので今日は寝袋他をヴェルナーの袋に託してリュックは自分で持つ。昼前に今日の宿、Sattel 小屋(標高 3400m)に着く。まさに夏山だ。この高さで蠅やあぶが飛んでいる。昼食後、小屋の脇から小 Meru(標高 3800m)へ向かう。思わぬことが起きた。小屋に戻って頭痛である。「風邪か」と思った。寒気を感じて慌てた。大事な本番を前に大変、と大急ぎで着込んだ。実は高山病だと知るのは一兩日後である。この高度で高山病は予想しなかった。それなりの準備はあったにしても 4600m の Monte Rosa ですら高山病の実感はなかった。高山病にしろ、風邪にしろこれからの Kili 本番への不安が高まった。

Meru(標高 4566m)へは 12/29(土)未明四時に出発。月も星も明るい。今日も快晴のようだ。高度は今までの最高点 Monte Rosa に近い。この Meru も遠景では富士山に似た独立峰で美しい。一晚寝ても頭痛が消えない。風邪か高山病かの不安を持ったまま、山肌を巻くように大きくトラバースしながら高度を上げる。息切れを感じず。それが落ち着くと鼻血。驚くがこれも直ぐ止まる。あとは順調にザラ峠を登る。七時過ぎ、4000m を超す。この頭痛が高山病だとするとなぜだろう、と考える。南国で高度は同じでも空気が薄いのか、Monte Rosa は岩場での緊張が高山病を感じさせなかったのか。陽が出ると急に暑くなる。汗ばむ。九時前頂上。Kili 主峰が見える、左手にはケニアにつながる平原が広がる、後方には登ってきた「単調」な長い道が続く。下山は早い。昨夜の Sattel 小屋で昼食を済ませて Miriakamba 小屋まで降る。頭痛は依然消えない、とすると風邪かと不安は続く⁵。スパゲッティの夕食で少し元気を戻す。

12/30(日)、今日は下山日。六時過ぎ目覚めると頭痛は「殆ど」消えている。ホッ!とする。やはり高山病だったのか。途中の野原で象、キリンに遭う。大きい。アフリカを実感する。午後、四日振りにホテルに戻る。シャワーのあと Kili を肴にテラスで独りパーティ。ビール。肴は昼食残りのゆで卵。ウィーンから持ってきた残り物のレタスに味噌をつけて。日本からの乾し納豆。次いでは食堂で熱湯を貰ってきてなんと「焼酎の梅割り」。秋に日本から持ち帰った焼酎の残りどと食欲増進用に持ってきた梅干しが役立った。旨い。日本の味だねえ。レタスはなくなったが味噌を楊枝で掬って…。日本は間もなく大晦日。今年も定年も迎えた、そして明日から「人生最高点」に向かう。来年もいい年であって欲しい。いつまで高い山に憧れるのか、と問われても答えはない。が、この Kili の高さは最後だろう、二度と 5000m を越えることはあるまい。日本へカード書く、「さあ出発」と。

- 2001.12.31(月) : Mechame Camp (標高 3000m) まで登る。

さあ本番。今日からはテント生活。前半の高度対策が利いていることを祈る。ポーターの使い方も分った。それ用の荷袋に防寒具、嗜好品、着替えを詰め込んで車に積む。登山口(標高 1900m)までは車。ポーター等 46 人と合流。昼食後出発、Mechame Camp に向かう。今朝から胃調の悪い顔見知りの Kurt が悪化、荷を預けて空身でよろよろ歩く。前日飲んだマラリアの薬が原因、と本人が言う。とすると、自分はどうしよう、服用予定日は Kili 登頂予定の直前、体調崩したくないなあ、と真剣に考える。途中からの雨はキャンプ地到着前にあがった。夕方六時、日本では紅白も終わったな、見てたかな。テント設営。サポート隊の大テントは出来ていて、既に夕食の準備中。七時その夕食。スープ、チキンとポテトの煮込み、どれも旨い。話題が日本料理になる。ウィーンのすし屋とか、天婦羅とか。話題の中に入れてくれようとしてくれているらしいが、ドイツ語が聞き取れない。もどかしい。

⁵ 「風邪なら下に残れ」とヴェルナーに言われるのが心配で言い出せなかった。が、不安が勝って相談すると「案ずるな、皆頭痛だ、高山病だ」と一笑に付した。「そうなのか、皆平気そうだけど」と安心。

テントの相棒はヴェルナー。夜半目覚めると外で話し声、ヴェルナーがまだ隣のテント仲間と飲んでいる。「新年祝い」とウィスキーを一杯付き合う。二時過ぎ、小用で起きる。ヴェルナーがでかい頭をテント出入口に突っ込んで寝ている。これでは出れない。迷った末、反対側のテント下隙間から這い出す。パジャマが汚れるが仕方がない。満点の星。2002年が始まった。

- 2002.1.1(火) : Shira キャンプ地 (標高 3840m) まで登る。

五時過ぎ起き出す。大テントに灯がついている。既に朝食の準備をしている。聞くと、昨夜から湯沸かししている由。サポート隊のありがたさを思う。脇で見ていると紅茶を入れてくれる。身が暖まる。今年はウィーン最終年。楽しみも作りたいが、仕事も区切り。

マンゴ付きの朝食を済ませて九時前に出発。ポーターが大きな荷を頭に載せて追い越していく。彼らの平衡感覚に感嘆する。「ジャンボ」と挨拶する。「How are you?」ということらしい。中にはサンダル程度の軽装備もいる。不調だった Kurt も今日は回復、食も饒舌も戻っている。親切な老人で、私のドイツ語教師役である。3700m 地点の広場で早めの昼食。一時過ぎ、キャンプ地到着。既に富士山を超えている。幸い頭痛は強くない。南国だけにまだ森林限界に達していない。夕食はライス、グラッシュ、野菜煮込み。夕暮れの東空に Kili の頂が雲間に見える。今夜は冷える、という。少々厚手に着込んで八時過ぎテントへ。小用に二度、月明かりで歩ける。

- 2002.1.2(水) : Baranco キャンプ地 (標高 3950m) まで移動。

五時過ぎ起き出すとテント上に薄く白い雪。が、空は晴れている。少し歩いてみたが寒いので大テントに潜り込んで話し込む。童顔のコックが鍋でトーストを焼いている。時に熱そうにするので、箸を持ってきて使わせてみる。不器用ながらなんとか掴まんでいる。紅茶をくれる。今日はマラリアの薬の日だが、下山の明後日まで「忘れた」ことにする。身体が温まって辞去しようとする「箸を置いていけ」と言う。自分用にはもう一膳あるので進呈する。昨夜のうちに大用は済んでいたのに再び儀式。食べているからだ。つまり、食欲はあるのだ。今朝も空腹を既に覚えている。

Kili の向こう側から太陽が出てきた。急に暖くなる。あの頂上から東に向かって、日本に向かってケルンを建てて日の丸かざして、と頂上でのパフォーマンスをイメージする。朝食は先ほど焼いていたトーストの他に、ポリッジ、ベーコン、トマト、キウリ、西瓜。定番の紅茶。その Kili を正面に見て歩き出す。今日のキャンプ地は標高的には差がないが高地対策のため途中標高 4600m の峠コースを取っている。4000m を越えるとさすがに大きな植物はない。コケ類が主体になる。あちこちにごろごろしている大中の石は殆どが黒い。よくみると苔である。そんな石陰に可憐な花も時にある。ボタン菊に似ている。

なだらかな道が続くので、「速さ」を歩測してみる。500 歩で 500 余秒、つまり毎秒一步である。平地での毎秒 1.5 歩強に比べてかなり「ゆっくり」である。それが助かる。歩幅はもちろん傾斜に依るが、靴より少し長い程度だから 30~40cm だろう。追い越すポーターは平地と同じ感覚で歩いている。あの中にテント用品も料理道具も食材もあるんだ、とありがたく見送る。欧米人用には椅子も要るから折り畳み用を担ぐ者も居る。日本人なら車座だなあ、と変なことを考える。

昼食の野菜サンドのあと、4600m の峠に向かう。霧が出てきたと思ったら間もなく小雨、それがあつという間に白い粒になり雨具の上を音を立てて打つ。峠は雪だった。が、高度を下げるとともに雨になり、やがてあがった。三時過ぎキャンプ地に着くとテントは出来上がっていた。頭痛が進み、食欲が落ちている。あるいは峠の雪で身体が冷えたか。明日からの本番を前に不安が高まる。寝るのがベストと夕食早々テントに入る。夜半小用に起きて、序でになんと大用も済ます。明朝の気懸かり一つ解消。

- 2002.1.3(木) : Barafu キャンプ地 (標高 4550m) まで移動。本番前日。

先ず岩場の道を登る。そこから巻くように上り下りしながら山の南斜面を大きくトラバースして東に廻る。そこが目指す登頂ルートである。正午前、今日の最低地点 (3900m) の広場で昼食が待っていた。他のパーティも大勢居てさながら野外の大宴会場である。三時過ぎキャンプ地到着。頭痛強まるも昨日ほどではない。紅茶とポップコーンのおやつにも手が出る。昨日はこの食欲がなかった。明日は早いので今夜の夕食も早目。テルモスに「梅干し砂糖湯」を作ってもらい、明日の携行品を最終点検して七時過ぎ寝袋に入る。タイツもシャツも着けたまま。靴下も穿く。さらに寝袋の上にアノラックを被せる。

- 2002.1.4(金) : 本番。

夜半前に起き、軽くビスケットと紅茶のあと深夜過ぎにいよいよ出発。頭痛はさほど強くない。ヘッドランプの列が続く。Monte Rosa の雪原を思い出す。昨日から不調のもう一人の老人 Kraus はテントに残った。ここまで来て残念だろうと同情する。がこれも勇気か。Kurt は一緒だ。

延々と登りが続く。1000m 以上の「単調」な登りが却って疲れさせる。二時間も歩くとボーッとしてきた。睡眠不足の所為か、高度の所為か。瞼が閉じてくる。道は険しくないから滑落の恐れはないが、時に前の仲間に追突する。瞬間的に眠っているらしい。後からも追突される。普段の登山では周囲を観察したり次の休憩時にメモる話題を心の中で整理するのだが、この五時間の登りの間殆ど頭脳は停止していた。睡魔を追い払おうと独白したり、友の名を口にしても夢遊病者のように足を前に出すだけの作業だった。手が凍るように冷たく、手袋を二重にした。落ち着くとまた眠くなった。付き添いのガイドが唄ったり、掛け声をだして気を引き締めてくれる。が、その声もすぐ睡魔の向こうに聞こえなくなる。

六時、その眠りから急に覚めた。肩に相当する Stella Point (5700m) に出たのだ。その直前の記憶が欠落しているから歩きながら眠っていたらしい。気がつくとも明るさもある。抱き合っている仲間が居る。「着いたのだ」と実感した。「Berg Heil」と自分も口にして抱き合う。泣けてきた。涙が止まらない。顔がぐしゃぐしゃ。恥ずかしくも思うが、ここは素直に感動したいと涙を流す。この感動は何なんだろう。本当の Kili 頂上へは緩やかな道をさらに小一時間。「どうする?」と尋ねるヴェルナーに「もちろん行く」と答える。ここで引き返す仲間も何人か居る。Kurt も引き返すという。

七時にその頂上 (標高 5895m)。朝日は既に稜線を離れている。頂上付近に雪はない。東に向かい、日本に向かって三日遅れの新年の挨拶をする。合掌する姿にヴェルナーが「お前は仏教徒か」と聞く。「基本的にそうだ」と答える。涙が止まらない。感激が続いている。ヴェルナーと再び標識を背に写真。日の丸とも写真を撮る。気がつくと他の仲間はもういない。西方はるかに Meru が見える。



元来た道に戻る。これが今朝眠って登った道なのか、と思いながらひたすら降りる。Barafu キャンプ地での昼食はスープしか喉を通らない。荷を回収し、Rau キャンプ地 (標高 3300m) まで下山。最後のテント泊。幸い食欲が戻ってきた。八時に寝る。翌朝まで目覚めず。

- 2002.1.5(土) : Rau Gate (標高 1900m) まで下山。ポーター解散。六日振りのホテルへ。

頭痛は殆ど消えている。ポリッジ、トースト、西瓜の朝食。ポーター全員が輪になって合唱。「キリマンジャロ」という唄らしい。尾瀬に似た湿原、森林帯を降りていく。途中の小川でタオルを濡らして身体を拭く。一時過ぎゲート帰着。登山証明書交付。登頂ルートがプリントされた記念のTシャツを買う。ホテルへ戻ってシャワーのあと、テラスで焼酎梅割り再演。夕食後のパーティで「登頂の喜び、泣けた理由」をドイツ語でスピーチ。日の丸に皆からサインを貰う。「吾が人生の最高点」の記念。

● 心理的最高点（ウィーン生活六年）

国際原子力機関 IAEA での勤務のため成田を発ったのは、一九九五年八月末長い真夏日が漸く終わった日だった。それまで深く関わってきた福井県鶴賀市の高速増殖原型炉「もんじゅ」が始めてその電気を送電線に送った翌日だった。それ以来、「海水淡水化への原子力利用」という新しい課題を通して、日本の原子力開発の中で育った経験を、国連機関の場で生かせることに「張り合い」を感じて過ごすことができた。



私生活にも多くの思い出が出来た。先ず一年を一行で振り返る。

1996年：同好会（ハイキング、ジョギング、TM⁶）積極参加。ドイツ語教室もスタート。

1997年：公務のあとエジプト古代遺跡訪問。TM欧州コンテスト初出場（ドイツ Heidelberg）。

1998年：Grossglockner（オーストリア最高峰 3797m）登頂。初の入院（耳下腺腫瘍手術）。

1999年：「日本書画展」企画開催。Madrid で暴漢に遭遇。中国西安・敦煌訪問。母逝く。TM/ATM-B。

2000年：インド Ajanta 訪問。Monte Rosa（スイス最高峰 4634m）等四千米峰六座登頂。南極大陸訪問。

2001年：日立定年。Mariazell までの 200km 山越え。『ウィーン便り』連載開始。

日本を発った時は「還暦前」つまり「定年前」に帰国の心積もりだった。が、状況がそのシナリオを変えた。それで良かったと思っている。多くの思い出が作れた。先輩を見ていて「還暦」とは単なる通過点と考えていた。寿命も伸びているし、大騒ぎすることも無い、と考えていた。ところが、近づくにつれて少し考えが変わってきた。ウィーンでの生活だったから、と言えるのだろうか。

公務の「海水淡水化への原子力利用」は、毎年の総会報告テーマだったことから分るように関心の高いテーマだった。技術、経験のある開発先進国と連携して利用側の中心である開発途上国の技術向上を支援し、「水」という重要な課題で問題解決に携わっている、という充実感があった。そこに自分の経験（原子力）と趣味（語学力）が活かせる、という充実感があった。といっても、原子力開発は足が長いし、工業先進国での最近の逆風もある。途上国側にはインフラ整備や資金問題もあって計画が順風満帆とは行かない。そんな中でも、途上国関係者から資料、国内での計画作りへの支援、研究推進への援助、実プロジェクト立ち上げ支援等の要請を受ける度に「頼られている」と感じ、新たな気力になった。関心を示す途上国は増えており、開発支援に積極的な先進国も多いからこの先もこのテーマは右肩上がりの道を進むだろう、と思えることは究めて嬉しい。インドのモデルプラントも供用開始目前である。韓国とインドネシア、フランスとチュニジアの共同開発研究も始まった。遅すぎる、と言われればその通りだが、国連内にも知人が増えて業務がやり易くも最近感じている。こんな公務環境が今の私を幸せにしてくれる。日本での定年年齢を昨年春（2001年3月）に迎え、IAEAの定年も来春に迎える。仕事人生の後半、多分に充実感を持って幸せだった。「終わり良ければ…」と素直に思う。

⁶ トーストマスターズクラブ。人前での話し方を練習する自己啓発型のスピーチクラブ。

私的にもそれに負けず幸せを感じること数年である。多くの新しい知人、新しい課題「水」やドイツ語の勉強、未経験だった異文化との接触、などなど。一方で、従来からの延長でもトーストマスターズクラブ、書、山歩きと「寸暇を惜しんで」楽しめた。日本の旧友との交流が復活し、日本の良さを再認識し、今では「帰国もまた良し」と来年を見やっている。こんな私生活の楽しさが、「ぱんぽん」に記事を書かせ、帰国後の生活にもダブって見える。新しく勉強したいことも出てきた、続けたい趣味もある、再会が楽しみな友は多い、訪ねたい日本の土地も目に浮かぶ、さらには日本を起点に出掛けたい旅先も思いつく。それを考えられる現在の「健康」がしみじみありがたい。新しいものへの好奇心、感動する感性とエネルギーがあるのは悪いことではない、それを「若さ」というならいつまでも若くありたい。こんな公私の充実感、幸福感が基盤になって一月四日 Kili 登頂時の感動になった。

あの日朝六時、それまで眠って歩いていたらしい単調な登りが終わって Stella Point (5700m) に出た。眠りから急に覚めた。「着いたのだ」。抱き合っている仲間の輪に自分も入って「Berg Heil」と叫ぶ。泣けてきた。涙が止まらない。顔がくしゃくしゃ。この感動は何なんだろう。心の中で考えていた、「頂上ではあれをしよう、これをしよう」と。この嬉しさは、辛い長い道が終わった嬉しさだけではない、目論んでいた頂上でのパフォーマンスが予定通り出来ること、六十歳の誕生祝という自分への贈り物が出来ること、ここ数年精神的にも充実した生活を送れている運命への感謝をこの頂上で祝えること、そんな幾つもの思いが心を占めて涙になっているのだ。眠気は完全に消えていた。日本語で感激を共有できる仲間が欲しかった。ヴェルナーに抱き着いてたまらず「嬉しい」と叫んだ。本当の Kili 頂上へは緩やかな道をさらに小一時間。頂上は見えている。

七時にその頂上(標高 5895m)に立つ。朝日は既に稜線を離れている。標識を背に写真を撮ってから予定の儀式に着手。頂上付近には形はよくないながら石片はある。小高いケルンを建て、東に向かい、日本に向かって三日遅れの新年の挨拶をする。自分への誕生祝、幸せな生活への感謝、今年の願い事、家族や友へのメッセージを胸に合掌。「願い事」を心で復唱し、Kili に「覚えておいてくれ」と口ずさむ。また感動が涙になる。涙が止まらない。見かねたヴェルナーが「泣くなよ」と声をかけてくる。儀式に半時間。ヴェルナーは待っていてくれた。他の仲間はいない。

